

第2回看護研究会

(看護補助者教育研修会)

● 日時 平成30年8月8日(水)
10時～16時05分
● 会場 岡山口イヤルホテル
● 出席者 85病院202名・委員9名

看護補助者を対象に、午前中は認知症の人への対応について、午後からはノーリフティングについて講演と演習があった。

講演

認知症を持つ人に寄り添うコツ



講師 津山中央病院
認知症看護認定看護師
小幡 陽子 専門副看護部長

認知症患者は2025年には、約7百万人になると予測されている。認知症は稀な病気ではなく、年齢を重ねれば重ねる程身近な病気になる。

認知症と決めつけず、年齢を重ねれば起こる自然現象であることを理解した接し方が重要である。人は加齢と共に視野が狭くなり、背中が丸くなることで上部が見えにくくなる、ということを理解しておくことが大切である。必ず本人の前に立ちゆつくり聞き取りやすく話しかける。また、腕や身体を上から掴むと恐怖心が湧くため、下から支える持ち方をする。大きな声を出すのは、うまく表現ができないためである。

そこには必ず理由があることを理解した対応が必要であり、接し方を変えれば防げることがある。

環境とは周りの全てをいい、変えることができるものである。認知症の人を取り巻く私たちが接し方を変え、認知症高齢者に必要な居場所を作ることが症状の進行を遅らせ、その人らしく生活できることに繋がる。

人の感情は最後まで残り、認知症があっても人が自分をどのように見ているか分かる。振り返り現象とは、信頼できる人に振り返って確認することである。

研修

介護者にも対象者にも負担のかからないノーリフティングケア

抱え上げない・持ち上げない・引きずらないケア



講師 ナチュラルハートフルケア
ネットワーク
下元 佳子 代表理事

介護する側・される側双方において安全で安心な、持ち上げない・抱え上げない・引きずらないケアをノーリフティングケアと呼ぶ。安全で安心な介護・看護を提供するためには、間違った身体の使い方を無くし、対象者の状態に合わせて福祉機器や用具を有効に活用して取り組むことが必要である。ノーリフティングケアは誰にでもでき、双方に負

り、なじみの顔が見える環境をつくることで安心できる。また、その人の世界に入って声をかけることが大切である。コツは、よく話を聴く。否定しない。怒らない。優しく接する。スキンシップ。ゆっくりしたペースで笑顔で接する。そして、役割が果たせる支援をすることである。

認知症を持つ人は、私達の鏡になる。私達の関わり方、接し方がその人の行動になるということを忘れてはならない。認知症の人を理解して接していくことが大切である。

(看護研究委員 細川令子)

担のない短期間で習得が可能なケア技術である。

平成25年に腰痛予防指針が改定された。「人力での抱え上げは原則行わない」とあるとおり、管理する側は、環境を整える義務がある。腰痛予防の必要性と抱え上げない技術教育を行い、職員を守る取り組みをすることが不可欠である。管理側は一人ひとりの意識と働き方を変える仕組みづくりが必要であり、組織体制を整えること＝マネジメントが重要である。

ボディメカニクスは、支持基底面積を広くし、重心を低くすることが基本であるが、人が持っている重さは20kg～25kgが限界である。抱え上げ・持ち上げるとは、重心の移動を利用し安定した支える面を作る。動かしたい部分の重心を少しずつつ移動させながら動き



▲下元氏によるグローブを使った演習

どのような状態でもどこで暮らしている人も、人としてあたりまえの生活を保障する。そんなケアを拡げることが大切である。

(看護研究委員 板谷啓子)